
妖術桎梏 - ようじゅつしっこく -

山川夏鄙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖術桎梏・ようじゅつつこく

【Nコード】

N0800V

【作者名】

山川夏鄙

【あらすじ】

表世界と、『裏』世界――

表世界は、とても平和。『裏』世界は・・・人買いや奴隷などが存在する。

その『裏』世界に幼い頃、足を踏み入れてしまった主人公の龍雲雷りゅううんらい。雷は親友と出会い、人生は安定したかと思えた。しかし、人生をも壊す『裏』世界。

雷が歩んだ道の原点となる物語が語られる――・・・。

ブログ 古物語 (前書き)

小説投稿・・・初めてです・・・(;´°・ω・´)(:
文章中でなにか不明なことがありましたら言ってくださいw
・・・これはファンタジー系と言ってもいいのか・・・？

プロローグ　く古物語く

昔々あるところに、『黒魔術』を操る『妖術師』がいました。

『デビトリ』では『黒魔術』を使っではいけません。

その『妖術師』は『黒魔術』のことはみんなには内緒にしておくことにしました。

ですが、そんなある日。

『妖術師』のもとに手紙が届きました。

—— お前の秘密をバラされたくなければ俺の言うところに来い。

決闘を申し込む。

誰からの手紙か、すぐにわかりました。

—— 第一広場にて。

さっそく『妖術師』はいきます。

そこにいたのは——・・・

悪魔でした。

二人は決闘をしました。

死ぬ寸前まで追い詰められた『妖術師』はついに、『黒魔術』を使って攻撃してしまいます。

すると、偶然目撃してしまったある『魔術師』がいました。

『魔術師』は、『Aランクシード』という組織に報告を。

即刻、『妖術師』は追放されてしまいました。

『妖術師』は悪魔を憎みます。

なぜあの時、決闘に応じた・・・！？　応じなければ『黒魔術』を誰にも見られなかったはずだ・・・！　そもそも、悪魔が呼んだから、悪魔が・・・！！！！

とてもとても、沢山憎みます。

ついに、『妖術師』は『デビトリ』という妖術の世界から王石を盗んでしまいました。

『妖術師』は、ある『神』に頼みました。

——今から百年後の、この時刻に生まれてくる赤子の瞳にこの石を埋め込んでくれ。

『デビトリ』にいるみんなは王石を探します。

しかし・・・見つかりません。

『神』の手元にあるのだから。

『神』は『妖術師』に頼まれたことを実行しました。

今から百年後の、二月二十九日に生まれてきた赤ちゃんの運命は大きく変わっていくでしょう。

——あなたに、神の加護がありますように。

——私が、この赤子を守ってやろうか・・・!!

続く

ブローグ 〱 古物語 〱 (後書き)

なんとか無事できましたね

こつゆう書き方はブローグだけですからね (- - -)

ちゃんとあらずじみたいな書き方で物語進めていくんで . . . (*)

、 *)

第一章　く出会い・最初で最後の　其の1（前書き）

一章全てを載せるのは時間などの問題で難しいので、分けて載せることにしました！（・、・）一話目をプロローグで使ってしまったので、一話分ズレてしまいました・・・（・ε、・）これからほとんどズレてまいります・・・

第一章　く出会い・最初で最後の　其の1

― 栄琉塚　優　視点 ―

「ねえ、そこの子一人？」

私はこの前、ナンパされた。

「すみません、急いでいるので・・・」

「ちよつとだけだから。　ね？」

「あの、本当に・・・」

「ね？　行こ行こっ！」

男二人が私の腕と背中を押す。

「ちよ・・・！やめてくださ——ゴンッ！

鈍い音がする。

フツと体が軽くなった。

音の方を見ると、男二人は倒れていて代わりに女一人が立っていた。

「あの・・・ありがとうございま——あれ？君、エレグトル学園にいるよね？」

女はコクリと頷く。

「礼には及ばない」

「ねえ、名前は？私は栄琉塚^{えりづか}優」

「俺は龍雲雷だ」

「・・・。　あれ？この人、女だね？　え・・・？　今、俺つて言つたよ？」

「え、雷つて私の隣の席の子・・・」

「俺はいつも出席してないからいつも空いてる」

その時の雷の顔は、少し寂しそうだった。

「ああ！！確かに・・・いつもいない・・・。　一人寂しいなあ・・・」

「そうか」

「ってことで！今は登校中だから学園行こっ！」

それが、雷との出会い。

それから雷とは親友の様に仲良しになった。

後から聞いた話、雷は有名な、最強ヤンキーだそうだ。

同理で制服を着ていなくても先生は気にしない訳だ。

クラスみんなに、「関わるのやめなよ」と言われたりもしたが

雷はそんなに悪い奴には見えない。

そしてもう一つ、とても驚く、いやありえない事が発覚したのだ。

続く

第一章　く出会い・最初で最後の　其の1（後書き）

ノートに下書きをしているんですが、だいぶ変わってしまいました：
（；。・ω・）：

分け方は、ノート1頁分を其の一分とします（・^O^・）

第一章　く出会い・最初で最後の　其の二（前書き）

一章の第二部です。

第一章　く出会い・最初で最後のく　其の二

その驚く事実。

それは・・・雷のスカートはギリギリのミニだ。そこから見えて
いるもの・・・。

「それなあに？」

私は、太腿から見えているものがなにか聞いてみた。

「短刀」

「・・・え、待つて。短刀？担当・・・かも・・・いやいや、
どう考えても刃物でしょ！！！！」

「何に使うの？」

「喧嘩するとき」

ダメでしょおおおおおおお！！！！！！！！

「警察に捕まるよ！つてか人斬るの！？もう犯罪者じゃん！！」

「警察などアテになるか。絶対に捕まる訳ない」

えー・・・なに言ってるの？よくわかんないんですケド・・・

そんなある日の下校。

「優、お前は幸せだな」

急に雷がポツリと言った。

「何が？」

「・・・お前は喧嘩の本当の恐ろしさを知らないからな」

「え？もう一回言つて・・・」

雷の声はとても小さかった。

ザアアア・・・

「あ、雨だ」

降ってくる雨に、かき消されそうな程に――・・・。

第一章　く出会い・最初で最後の　其の二（後書き）

少なくて申し訳ありません：（；。ω。：）：
一頁と言ったのですが、ここで丁度優視点が終わるんですよ（言っても良かったのかな？）。

感想、評価などお時間あればよろしくお願いします>（―――）<

第一章　く出会い・最初で最後の　其の三（前書き）

第一章の三部です。

第一章　く出会い・最初で最後の　其の三

― + 龍雲　雷 + 視点 ―

退屈だ。

なぜ世界はこんなにも穏やかなんだろうか。

いや、表向き平和だ。

だが、世界には『裏』がある。

『裏』の世界に足を踏み入れると最後、戻れなくなる。

そのうちの一人、俺もそうだった。

少しの好奇心で『裏』の世界と関わってしまった。

それからは奴隷としか売られたり、買われたり。

俺はあの日、また売られた。

あの男に。

その男は俺を決して売ろうとしなかった。

毎日毎日、真剣を持たされて訓練の日々。

俺はそのうちに、『裏』で「最強奴隷ヤンキー」と呼ばれるようになった。

なぜヤンキーなのかはわからない。

ただ、周りの人たちから見るとそう見えるのだろう。

金髪、男口調、奴隷界で唯一の女戦闘奴隷――

なにが最強だ。何が、なんで俺が奴隷に・・・！もとは「あの女」が悪いんだ。

三年間ずっと我慢していたものがついに心の中で爆発する。

俺は迷わず、訓練のときにどさくさに紛れて男を斬った。

そして『表』世界へ飛び出す。

俺はそれで逃げたんだ、と思っていた。

珍しく自分にしては甘い考えに悔やむ。

俺の行くところに必ず「排除奴隷」がいた。

『裏』は俺を排除するつもりなのだろう。
ずっと戦った。

一人で、ずっと・・・

「すみません、急いでいるので・・・」

街外れの小さな町で、女がナンパされていた。

ナンパしている男二人は、どちらも最下級の奴隷だ。

奴隷は手首に黄、白、青、赤、黒、のいずれかのブレスレットをつけている。

始めから順に最下級、下級、中級、上級、最上級、だ。

相手は黄、自分は黒。

「ちょ・・・！やめて・・・」

女が引つ張られた途端、体が動いた。

「最下級奴隷の分際で平民に気安く触れるなよ」

そう男の耳元で囁いた直後、俺は短刀を一つ抜いた。

柄の部分で二人の腹を同時に殴る。

なんの力を持たない二人はすぐに倒れた。

・・・俺たちは奴隷なんだ。

気安く平民に触れてはならない。

俺たちは、人間以下の存在なんだから。

続く

第一章　く出会い・最初で最後の　其の三（後書き）

もう一気に雷視点いつちやいます（ノ、）
次からは誰からの視点でもない、ナレーションに入ります。

第一章　く出会い・最初で最後の　其の四（前書き）

第一章の第四部です。

第一章　く出会い・最初で最後の　其の四

―*ナレーション*サイド―

「ここ最近、雷奴^{らいつと}は女子学生の栄琉塚優と一緒に行動しています」
「うむ……。栄琉塚のLVは？」

「平民でないかと思われます」

「そうか……。ならば、こうしよう。――オペレーション？だ
！」

「了解しました」

優と雷は休日、待ち合わせの約束をしていた。

雷は肉親も身内もない。

もうすでに、関わってはいけない存在に自分は成り下がってしまったのだから。

今まで倒してきた奴隷たちから奪った金はたくさん持っている。
権力が上の方の主人は奴隷が金持ちだ。

雷はいつものように近くのホテルに泊まった。

「雷ー！あつ、いたいた！」

雷は待ち合わせ場所の東京駅にいた。

約束時間の十分前からいたのだが、優もすぐに来た。

「じゃあ電車に乗って東京行って買い物行こ！」

「電車か……」

「なに？」

「いや、なんでもない」

「そう？ならいいんだけど……」

雷は、電車は危険な乗り物だ、と思っている。

もし、電車内で敵襲があつたら周りの人も巻き込んだじゃうし戦う範囲が限られている。

二人は改札口を抜け、電車に乗った。

休日にも関わらず人が少ない。

朝一だからだろうか。

ドアの近くにあつた席に並んで座る。

優は礼儀正しく、雷は足を組んで――・・・

「コラ、雷！！行儀悪いでしょ！？ただでさえスカート短いんだからっ！」

「俺に礼儀などない」

「どんな言い訳！？」

雷は仕方なく足を下ろそうとする。

刹那――

《気をつける。黒いものが貴様らを引き裂きだろう。そして貴様が死ぬことになる。――我は決して貴様を許しはしない！》
「！？」

続く

第一章　く出会い・最初で最後の　其の四（後書き）

緊張感ありませんねw次の話もそうなんですけどね・・・）：。
・；

第一章　く出会い・最初で最後のく　其の五（前書き）

投稿が遅くなって申し訳ありませんでした（・・・・・）

第一章　く出会い・最初で最後のく　其の五

雷は咄嗟に辺りを見回す。

「くそ・・・！またかよ・・・」

あの男を殺してから、頭の中に直接男の声が流れてくる。

絶対に間違えのない、予言が。

《東京、東京。東京駅に到着しました。足元にご注意してお降りください》

「わわっ！？」

雷はドアが開くと同時に、優の手を引っ張つ電車から降りて走った。

「どうしたの！？」

改札口を抜けると、雷は歩きだした。

「・・・なんとなく」

「やっと渋谷ついたねっ！どこ行く？」

優は雷の手を握りしめる。

あ・・・興奮しているのか。

優の癖を見ながら雷は無意識に口を開いた。

「剣」

「は？」

咄嗟に出た言葉だった。

「え？剣？剣買いに行きたいの？本物とか言わないでよ・・・。ほ、本物は昔に帯刀してはいけないうてゆう・・・」

優はパニックに陥って何を言っているかわからない状況になっている。

「本物に決まっている。——守らなくちゃいけない。優を、この手で守らなくては・・・！」

最後の方は、周りの喧騒にかき消されてしまつて聞こえなかったが

雷の目はいつも以上に真剣だ。

「雷——」「真剣ならワシの店にあるぞい。お前さんの愛刀を見つけれられるかもしれない」

近くにいたおじいさんが話に入ってきた。

「本当かつ!？」

「剣は、守りたい者がある者がこそが帯刀していいものなんじゃ。まあ、このご時世だとしても国の許可がいるがね。・・・じゃが、気持ちだけでも剣に伝わるんじゃ。とりあえず、ついてきなされ」
二人は、言われた通りついていく。

五分ほど歩いたところで、おじいさんの足は動きを止める。

「ここがワシの店、菊桜百一屋^{きくおうひゃくいちや}じゃ。菊桜百一というのはワシの愛刀じゃ。勿論国の許可は下りとるぞ」

優には、よくわからなかった。

愛刀？なんでこんな時代に本物の剣なんか・・・。江戸時代とか明治時代とかじゃないんだから・・・！

優が考えている間にも雷は店に入って行く。

「あ・・・待つて・・・!」

優は雷に付いていった。

く

続

第一章　く出会い・最初で最後の　其の五（後書き）

ううん・・・話は進展したのかな？
次回作もよろしくです（*^^）v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800v/>

妖術桎梏 - ようじゅつしっこく -

2011年10月9日12時02分発行